



本学会名誉会員 金形泰弘先生

令和4年10月4日にご逝去されました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

日本細菌学会

故 金政泰弘 名誉会員 岡山大学名誉教授 御略歴

大学教育・研究活動

- 1926年6月21日 岡山県児島郡藤田村に生まれる  
1944年3月 岡山市岡山第一中学校卒業  
1947年3月 第六高等学校卒業  
1951年3月 岡山医科大学卒業  
1952年5月 岡山大学医学部微生物学教室副手  
1953年2月 岡山大学医学部微生物学教室助手  
1955年7月 岡山大学医学部微生物学教室講師  
1962年6月 ウィスコンシン大学酵素研究所留学（～1964年9月）  
1965年4月 日本学術振興会流動研究員、東京大学薬学部（～1966年8月）  
1969年4月 岡山大学医学部助教授 微生物学教室  
1974年10月 岡山大学医学部教授 細菌学講座担当  
1987年4月 岡山大学評議員（～1989年6月）  
1987年6月 岡山大学医学部長（1989年6月）  
1990年5月 中国医学科学院・協和医科大学名誉教授  
1992年4月 岡山大学名誉教授  
1992年4月 岡山県立大学創立準備室長  
1993年5月 岡山県立大学保健福祉学部部長  
2001年4月 玉野総合医療専門学校校長  
2005年4月 玉野総合医療専門学校顧問

受賞

- 1969年12月 岡山大学医学部結城賞  
1991年1月 山陽新聞学術功労賞  
1991年9月 三木記念賞（国際親善部）  
2001年9月 瑞宝中綬章

日本細菌学会活動

日本細菌学会評議員、理事、国際交流委員、将来計画委員、編集委員、用語委員、日中交流会委員、教育委員、中四国支部長、第4回日中国際微生物学会長、第29回中四国支部総会会長、第22回ブドウ球菌研究会会長、第61回日本細菌学会総会長、国際微生物学会登録部会長

その他学会活動

日本化学療法学会、日本ウイルス学会、日本感染症学会、日本医学教育学会、ブドウ球菌研究会、緑膿菌研究会、日本電子顕微鏡学会、日本脂質生化学会、日本膜学会、米国微生物学会、

国際交流活動

- ビルマ感染症研究協力（JICA 1980年～1989年）  
スーダン、ハルツーム教育病院プロジェクト（JICA 1982年～1992年）

社会活動

ロータリークラブ会員、岡山県国際交流プラザ理事、岡山県科学技術フォーラム委員、その他

## 故 金政泰弘先生を偲んで

本学会名誉会員、岡山大学名誉教授 金政泰弘先生は令和4年10月4日に逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

金政先生には70年の長きにわたり岡山大学医学部の大学人として、医学・医療教育、大学運営に献身され、同時に、日本細菌学会会員として、医学細菌学研究の研鑽と後続研究者の育成に誠心誠意をもって注力され、多くの細菌学教育・研究者を排出されました。ここに先生のご功績の概要を記し、ご指導・ご鞭撻を頂いた御恩に深く感謝し、心からの敬意を表して、哀悼の辞といたします。

安らかなご冥福をお祈り申し上げます。

先生は岡山県児島郡藤田村に生まれ(大正15年6月21日)、小学校は地元でいたずらっ子で天真爛漫に育ち、成績は優秀だったので岡山市第一中学校へ合格され、さらに中学校の推薦を受けて当時は名門の第六高等学校へ進学されました。ここでは全員が入寮し、先輩・後輩・同級生が文字通り寝食を共にし、学業、スポーツ、文芸などの部活動に切磋琢磨し、いわゆるリベラル・アーツを体得され、深く強い友情の絆を形成されました。この入寮生活が人間金政泰弘を形成し、以後の社会活動の原動力となりました。高校卒業後は機械工学か生物学を学ぶべく、東大理学部動物学科へ合格されましたが、都合で岡山大学医学部へ進学されました。大学卒業後は本来の希望でもあった生物学を学ぶために基礎医学研究室である岡山大学医学部微生物学講座・村上栄教授の門下へ入局されました。入局後、機を得て、米国ウィスコンシン大学酵素研究所へ2年間留学、帰国後ウィスコンシンで縁を得た東京大学薬学部水野研究室へ流動研究員として派遣されました。帰学後、岡山大学医学部講師、助教授を経て、1964年、「大学紛争」の華やかなりし頃、岡山大学医学部教授に選任されました。大学当局(教授会)も全共闘も先生の中立的な活躍ぶりと誠意ある言動を高く評価してのことでした。就任以後は大学紛争の再建に中心的役割を果たしながら、分子生化学講座の新設、医学教育カリキュラムの改正など、大学運営に尽力しつつ、学生・大学院生の教育に注力されました。当時はやや斜陽傾向にあった細菌学でしたが、金政教室には常に5~10人の学生が屯して、若い笑い声の絶えない教室でした。その結果、金政門下から細菌学研究者や指導者として、門下生の約40~50名が細菌学関連の分野の専門家として巣立ち活躍しています。

細菌学研究は、村上研究室の課題であった細菌生理学の一端として細菌の表面構造と機能を解析しながら、脂質の解析研究を始められました。縁あってウィスコンシン大学酵素学研究所に留学し、脂質解析の手技を習得し、リン脂質であるカルジオリピンを同定し、帰国後、東大で流動研究員をしていた頃に、大腸菌にカルジオリピンの存在を証明し、細菌の表層構造・細菌膜の研究に取り組みられました。もともと細菌の生育、環境適応機構に興味を持っておられたので、ブドウ球菌の食塩耐性(10%食塩を含む売市で生育する)にはカルジオリピンが関与することを示し、その生理機構を解析され、その成果は細菌学会、生化学会、国際ブドウ球菌学会などで発表されています。この功績に対して岡山大学医学部結城賞を受賞されました。その他エルシニアの環境適応性、環境汚染指標菌、食中毒起因菌などについて、細菌生理学の立場を守りながら、細菌学研究を指導され、感染症、環境感染、食中毒等に関する啓蒙活動も実施されました。

細菌学会で特筆すべきことは第61回日本細菌学会(1988年)を岡山で主催されたことです。この年は瀬戸大橋が完成した年でした。会員にも大工事を見学してもらおうべく、観光船である「御座船」を借り上げて、船上で評議員会を開催されました。参加者は大変喜ばれ、懸案であった議題「会費の値上げ」は

難なく承認された、という逸話が残っています。この学会は、学会会場として初めてホテルを使用したこと、学会60周年記念シンポジウム「温故知新－細菌学の今昔」を製本としたことで、高い評価を得ています。

国際協力事業では二つ大きな業績を達成されました。

一つは、ビルマ感染症研究協力は京都大学東昇教授の誘いで「ビルマ国におけるアルボウイルス感染症および腸管感染症、特に下痢症の主要原因菌の研究とその対策」に関与し、JICA 専門家として、また生物医学研究センターを立ち上げ、教室員の専門家を派遣して1989年まで研究協力事業を実施されました。1989年、残念ながらビルマ国内の政情不穏によりプロジェクトは中断し、終了しました。

もう一つは、スーダン、ハルツーム教育病院プロジェクトです。当時、ヌメイリ大統領から「スーダンで育てた医師が先進外国へ流出するのを防ぐために、当地へ教育病院を建設してほしい」との要請があり、これを実現するために奔走し、外務省とJICAを説得してプロジェクトを成立させ、イーブンシナ教育病院（120床）を建設しました。病院建設完成後には岡大医学部全学を挙げて協力し、若手医師50数名を指導医として現地へ派遣されました。退職前にプロジェクトを完了し、イーブンシナ教育病院（120床）を円滑に相手国へ引き渡しました。これに対して三木記念賞が授与されました。

岡山大学を退職後は、より良き医療のためには医療科学・技術の発展が必須であると考えられていたところへ、岡山県および民間から大学運営の手腕を認められて、岡山県立大学、玉野医療専門学校の創設を委任され、全力を尽くされて成功裏に開学されました。このことは、岡山県の医療行政に比類なき大きな貢献をされものとして、県民に大きな恩恵を施されています。

先生の明るく、フランク且つ実行力を伴うお人柄－「人間力」－が、研究室に人が集まり活力を生じさせる要因でした。先生の間力（人間力）は学生時代に養われたリベラル・アーツに源があります。先生の生涯の信条は「質実剛健」、「源深流長」でした。それは小学校から第六高等学校までに養われたものでしょう。第六高等学校は終戦とともに改組され、先生は同窓会幹事や全国寮歌祭を主催され、閉校のお世話もされました。第六高等学校で体得された先生の間力は、当時の高等学校校長の訓辞に端的に述べられており、それを実行されたことで養われました。

いま、先生を永久の旅路にお送りするに当たって、第六高等学校校長の訓辞をそのまま先生の遺訓とすることを御赦してください。後に続く私どもは、常に先生の御遺訓を堅持し続けてまいります。

どうか安らかにお休みください。

付記 第六高等学校第九代校長 黒正 巖 入学式における訓辞 （1944年）

「高校生（学者）の本分は真理探究、道理徹底、哲学の精神にある。そして諸君はすべからく洗練された野蛮人であれ。それが自分の真理であり、哲学ならば他人の目や常識など気にせず、自分の責任において何でもやってみる蛮勇の徒たれ。今の時期、一つや二つの失敗は、失うものよりも、得られるものの方が遙かに大きい」

追悼者 日本細菌学会名誉会員 林 英生